

令和5年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(総合型選抜)

課題論文

(地域学部 地域学科 国際地域文化コース)

(注意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は4ページ、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚である。
指示があってから確認すること。
3. 解答は解答用紙(横書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

次の資料は、中野三敏「和本リテラシー」の回復のために」（池澤夏樹編『本は、これから』所収）である。これを読んで、次の問いに答えなさい。

問一 この文章で著者は、「和本リテラシー」という言葉をどのような意味で用いているか、また、なぜそれを回復させなければならないと考えているか。二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 歴史・芸術・文芸等、様々な領域で劣化や散逸が進む資料をデジタル化することの意義と課題について、あなたの考えを具体例を挙げながら八〇〇字以内で述べなさい。

【資料】

この本のテーマは、これからの本はどういう姿になるのかと、これまでの本はどんな運命をたどることになるのかという、たぶん二つの問いかけを含むのだと思う。

前者の問いかけに対しては、私など何の答えも示し得ないし、できることならこれまで通りであってほしいと思うだけである。しかし先日、愚息には「PP」なるものを見せられて正直感した。なるほど、これからはこの方向に向かわざるを得まい。（中略）

とにかく転換は必至であるとして、三世紀とまでは言わぬが、できうる限りの時間をかけること、願いはその一点のみである。物としての本の有意義性を十分心得ている我々の世代まではまだよからう。しかし電子書籍しか知らぬ世代になった時、果してどんな知性が育まれることになるのか、空恐ろしい思いをもつのは私独りだろうか。ともかく共生の時間をできるだけ長くもってほしい。

次の問いかけ、これまでの本はどうなるのか。（中略）

その、物としての原姿・原型は丁重に図書館・美術館・資料館・研究所・有識者等において整理、保管し、いつでも要求に応じてその容姿・手触りを確かめ得るような配慮は必須であろう。現物としての重要度がより一層上ることは、これまた必至である。

問題はそれ以前の本版本、及び写本類である。これが過去千二百年の間に積み上げられた日本人の経験と思弁の総体であることは言うまでもないが、その総数の確認の目安

はある。岩波書店編集の『国書総目録』は明治以前の日本人著作物の総所在目録を五十音順に並記したものであり、一応五十万点と数えられている。当然それに洩れたものも多いので、大方、百万点を越すと考えて誤るまい。国家的事業として、それを取りこむことは、予算と時間さえあれば、それほど問題はなからうが、本当の問題は、誰がそれを読むのかという所にある。

知つての通り、この書物群は、楷書体の漢文著作以外はすべて、変体仮名と草書体漢字、即ち「くずし字」によつて記されている。出版物が現在のような仮名字体に定められたのは、明治三十三年に、一音節を一文字に限定した小学校令が施行されて以来のこととて、よほど特殊なものでない限り、活字体の漢字と右の仮名字で記され、くずし字は手書きの場合のみとなった。それでも昭和戦前までの教育を受けた人には、自然とその能力（これを私は「和本リテラシー」と呼ぶ）は残っていたが、決定的にそれを失つたのは戦後のことなので、まだせいぜい六十五年ほどにしかないのに、今や大学院を出た人でも、国文・国語・国史といった学科の、それも近世以前を専攻する人のみが辛うじて具えるのみで、それ以外はほとんど壊滅状態といえる。むろん字体を限定したことによるメリットの大きさは十分わかるが、そのデメリットに関してはほとんど一顧だに与えられなかったのではないか。

ところで電子書籍に明治以前の書物を取りこむ場合、写本であれ木版本であれ、まずは原本をそのままスキャンしてというのが常識であろうが、前述した事情にてらせば、それではほとんど誰も読めないことになる。これまた確認はできないが、和本リテラシーをもつ人の総数は、前述の専攻に因んだ研究者とその卵を数えあげたとしても、おそらく三千人を少し越えるほどの数であろう。日本人の〇・〇〇三%にしかない。そこで、既に活字化された書物だけでもということになれば、その総数は歴史・芸術・思想・社会・文芸、ともかくあらゆる領域を総ざらいしてみても、おそらく一万点には及ぶまい。総数を百万点として、わずか1%にしかないのである。

日本の知識人で古典は必要ないと言いきれる人はおそらくあるまい。そして、そうした人達はおそらく、必要な古典はほとんど活字化されているにちがいないと思ひこんでいるのではないか。しかしそれ以外の活字化されないものは読めないとすれば、実際の

所、日本の知識人の大半は、先人の知的遺産のわずか1%しか利用していないことになる。これほどもつたないことがほかにあるだろうか。

ただし、明治以降の先人が責任をもって選んでくれた古典を活字で読めるのなら、それで十分ではないかという考え方もあるのかもしれない。しかしこれまで活字化された古典といえば、根本的には近代主義の名のもとに意味づけられ、必要とされた書籍であることは当然であろう。その近代に明確な疑問符が付き始めた今日、必要なパラダイム・シフトが、近代主義で選ばれた古典を読むだけで、本当に大丈夫なのか。鍵はむしろ残りの九九%にひそんでいると思うのが常識なのではないだろうか。その九九%を読めるのが、何と国民の〇・〇〇三%しかないという、何とも凄まじい文化状況が出現してしまっているのである。

九九%全部を活字化した上で電子書籍化するのには、たぶん夢物語であろう。それよりは、今は読めずとも、とにかく全部を原本のままに取りこむ方がまだ早い。ここはどうしても公的機関の出番であろう。例えば国文学研究資料館など、館を挙げて変な選択基準などを考えず、片っ端から取りこめばよい。その上で並行して、文化行政を一から考え直し、小学生に英語を教える傍らで、せめて一時間でもくずし字の勉強をさせるようにしたら如何なものか。むしろそれらの学童が本当に古典を読む必要性に目覚めるのは、なお十年ほど後の事にはなるだろうが、小学生の時に覚えた文字は、志さえもてば思い出すのもそれほど困難なことではなからう。早い話がアメリカの小学生で十八世紀の「独立宣言」をそのまま読めない子供はいないだろうが、日本の知識人でたかだか百四十年前の福沢の『学問のすゝめ』を、刊行された姿のまま読める人が何人いるだろうか。古典を活字で読むということは、つきつめれば「翻訳」で読むことにしかならずである。外国語の習得は、空間的な他者の存在と意見を知るための営為として、その必要性は十二分に認めるが、くずし字の勉強はその十分の一の努力で十分であり、さらには時間軸を遡って、他ならぬ先祖という他者の意見に直に触れる、唯一最良のルートを見つけていることなのである。

これまでに、私は事あるごとに「物としての本」を理解することを最重要事として論じてきた。ただしそれは結局の所、前述した三千人を対象としていたにすぎない。せめて

その範囲の人には先人の生活と意見のすべてを曲りなりにも「翻訳」ではなく、直に感得するための無二の方法になり得ると信じていたからである。

今後、和本リテラシーの回復に成功すれば三千人は一挙に一億三千万になり、電子書籍はそれらの人々に先人の叡智のすべてを公開することになる。「物としての本」の理解は、その上のこととしても別にかまうことはない。もちろんその時まで「物」を電子情報としてだけではなく、具体的に立派に保存・整理する義務は当然のことであり、また、電子化してこそ、その義務はより明確に意識されるようになるだろう。読めないがゆえに、毎日、反故^{ほんご}となつて廃棄され続ける運命にある和本（この辺りはもう少し詳しい事情の説明が必要であろうが、本稿ではその余裕がない）は、その時ようやくその運命からまぬがれることができる。電子書籍はそのための福音のように感じられるこの頃である。

【出典】池澤夏樹編『本は、これから』（岩波書店、二〇一〇年）

※適宜、文章の一部を省略し、ルビを追加するなどの改変を加えた。